知恵史上におけるソクラテス〔その一〕

北畠知量

はじめに
第一章　賢人の知恵
Ⅰ　賢人伝説における知恵
Ⅱ　知恵の表現
Ⅲ　ソロンの知恵
まとめ
第二章　哲学者の知恵
第三章　ソフィストの知恵
第四章　ソクラテスの知恵
結　語

はじめに

初期対話篇に描かれているソクラテスの最大の関心事は、知恵 σοφία を愛し求めるような生き方をするということであった。このことを彼は、「徳に留意する」とか「魂の世話をする」などという言葉で幾度も言い直してい

る。なぜであろうか。「知恵を愛し求めよ」と言っただけでは一般の人々に理解されにくい事情があったからである。ではその事情とは何であろうか。それは知恵という言葉の内実そのものが多義的になっていたということに他ならない。

知恵 σοφία という言葉は、おそらく他の言葉も同様であるが、様々に意味の変遷をとげてきた。この言葉が文献上に現われはじめるのは、前七世紀初頭の頃であるが、その場合の σοφία とは技術的な能力や巧みさ、あるいは技術上の工夫を意味する言葉にすぎなかった。

アリストテレスは『哲学について』という書物の中でこの言葉について触れ、「はっきりしたもの（σάφεια τις）であって、すべてを、はっきりさせるようなものが知恵（σοφία）と呼ばれたのである。それで、この、はっきりしているとは、明るいものであるので、隠れたものを光のもとにもたらす故に、光によっていわれているのである」と説明してはいるが、この知恵ないし知者という言葉は多義的であり、古人はこれを五つの意味で用いてきたと指摘した上で、知恵の発生事情と σοφία の意味内容の変化について、次のように述べている。

……（人類は、様々な仕方で、特にデウカリオンの世にあったと言われているような大洪水によって滅びかけはしたが）……(一)これら生き残った人々は、養われる糧を持たなかったので、必要にせまられ、用立つものを工夫した。すなわち、或いは臼で穀物をひき、或いは播種し、或いは他のこのようなことの工夫をしたが、生活に必要なもののために役立つことを見出すこのような着想を知恵と呼び、着想をもった人を知者と

呼んだ。㈡かの詩人の言うところによると、彼らは更に、アテネ女神の奨めで、諸々の技術を工夫した。それは生活の必要のためのみにとどまらず、美や雅にまで進んだ諸技芸であった。それで、これをまた、知恵と呼んだし、それを発明した人を知者と呼んだ。「知恵にすぐれた工匠は組み立てぬ」とか「アテネ女神の知恵の助けに、よく弁え知りて」という如く。見い出されたことどもが、きわめてすぐれている故に、それらのことの着想を、彼らは神に帰した。㈢彼らは更に、都市にかかわることに眼を向け、法律や都市（ポリス）を形成するすべてのことを見出した。この工夫をもまた、彼らは知恵と呼んだ。都市的諸徳を見出したかの七人の知者（七賢人）は、このような人々であったのだ。㈣次いで、残るところも道にかなって進んで、体そのものや、それらの造化の本性へと進んできた。それを特に自然の学問（φυσικὴ θεωρία）と呼んだ。このような人々を自然の本性にかかわる知者とわれわれは言っている。第五に残るところ、神的で宇宙秩序を越えた、全く変転せぬものに達した。そして、これらのことの認識を、最もすぐれた知恵と彼らは名付けた。　『断片集』

この見解からすると知恵なるものは、生存のための農耕の知恵から始まり、次第に技術的な知恵、人間関係をとりなす知恵、自然に関する知恵へと発展していき、やがてこれが神的なものを認識しうるようなレベルに到達したのだと解し得る。つまりアリストテレスは、現実的で実用的なものから、神的で観想的なものへと上昇・発展するものとして知恵を把握しているのである。勿論このように把握できるかどうかは問題である。だがこの言葉が、前

七世紀初頭の頃から次第に抽象的な意味を帯びていったということだけは疑う余地がない。そしてソクラテスの時代に、この言葉が相当多義的な内容のものとなっていたということも疑い得ないところなのである。

このような事情を念頭においた時、知者と呼ばれる人々にも様々な変遷のあったことが了解されよう。人々は各々の時代の通念から判断してある種の人々を知者と呼んだからである。従って知者とは、その人自身の知恵の問題であると同時に時代の問題でもあるのである。

さて、知者のタイプが時代によって変るということになれば、知者の歴史的類型ということを考えることが可能になってくる。このような視点から見た場合、古代ギリシャには四つのタイプの知者が存在した。すなわち、七賢人に数えられる人々、タレスに始まる哲学者達、弁論術を教えたソフィストそしてソクラテス、がこれである。これらの人々の知恵の中身とは一体どのようなものだったのであろうか。そしてソクラテスの愛し求めようとした知恵は、どのような点でこれらと異なっていたのであろうか。

本稿は、これら四つのタイプの知恵を比較してみた場合に、ソクラテスの知恵が一体どのような特色をもつものとして浮かび上ってくるかという問題の考察を通じて、ソクラテスという教育者――知を愛し求めよと人々に説き続けた教育者――の核とも言える部分に光をあててみようとしたものである。※

※　枚数の制約上、ここに掲載したのは第一章のみである。

第一章　賢人の知恵

I　賢人伝説における知恵

前六世紀のはじめの頃に、七賢人と称される人々がギリシャ諸国で活躍した。そして彼等の名前と業績は、雑多な賢人伝説によって今日に伝えられてきた。

彼等に関する最古の資料である『プロタゴラス』(343) には、七賢人のメンバーとして、タレス、ピッタコス、ビアス、ソロン、クレオブロス、ミュソン、キロンの名があげられている。同書が執筆されたのは、前四世紀初頭の頃であり、それ以後、多くの人々が彼等に関する様々なエピソードを後世に伝え続けた。そして三世紀初期に『哲学者伝』を書いたディオゲネス・ラエルティオスは、ミュソンのかわりにペリアンドロスの名をあげてこれらを七賢人とし、更に追加するならばアナカルシス、ミュソン、ペレキュデス、エピメニデスの名があげられると指摘した上で、七賢人全員に関する総合的なエピソードをまとめ上げたのである。※

※サラミスに生まれたソロンは、アテナイの階級闘争の調停者となって、債務の帳消し σεισάχθεια を実施し、様々な格言詩を残したことで有名である。コリントスの独裁僭主となったペリアンドロスは、奴隷を禁止して農民の保護につとめるとともに、他国の僭主と友好関係を保ち、海上貿易に力をいれ、祭礼を盛大に行なって国威を高揚させたと伝えられている。ミレトス出身のタレスは、日蝕を予言し、万物の根源は水であるというテーゼを残したが、星を観測しながら歩いていて井戸に落ちたという失敗談も残している。常に七賢人に数えられるわけではないが、エピメニデスは神がかり的な呪術者で、身体から魂を解き放つことが出来たと伝えられている。　Diog. L. I. 22—122 Loeb.

賢人達に関するこれらの伝説によると彼等は、様々な性格をもったバラエティに富む人々であり、活躍の分野もそれぞれに異なっているのであるが、彼等が一律に七賢人と呼ばれるようになった事情とは、一体どのようなものだったのであろうか。

七賢人の成立事情について考える場合には、前七世紀末から前六世紀の間にギリシャ諸国がどのような状態に置かれていたかを念頭においておかねばならない。

この時代は、貴族的な社会制度を支えていた諸要素が大きく変化した時代であった。七世紀のはじめ頃より、人口増加を解消するために始められた大規模な植民運動によって、植民市と母市との間の交易が盛んになってきた。地中海沿岸に点在する町で、かつてギリシャの植民市であったものは百以上も数えられるが、これらの植民市から母市へは穀物、魚類、金属、羊毛、木材、奴隷が運ばれ、逆に母市からは、酒、オリーブ油、工業製品等が送られた。このような交易活動の発展により、地主的な旧貴族のある者は商人貴族へと変貌したし、またある者は金銭万能の世を嘆きながら没落していった。社会階層全体に大き変化が生まれたのである。ソロンは次のようにうたっている。

多くの下賤の者が富み、多くの高貴の者が貧しい。しかし私は、アレテーを富と賛えようとは思わない。アレテーは持続するものだし、富はあるときにはこの人に、またあるときにはあの人に帰属するものだから(1)

商業交易活動は貨幣の流通を促した。そして貨幣は、今や生活のすみずみにまではいりこんできた。市民達の経済生活のレベルは向上し、自費で武具を調達出来るようになってきた。貿易の発展が、より安価な金属（武具の原料）を市場にもたらしたからである。このことによって、かっては貴族につき従い、一対一で戦った人々は、今や密集隊列を組み、集団の戦闘をするようになった。勿論この変化は、一騎打ちこそが誉れであると考えてきた貴族の地位を相対的に低下させる結果となった。これらのすべてが、従来の貴族制度の矛盾を一層あらわなものとする役割をはたしたのである。特にアッティカでは、貴族間の軋轢と債務奴隷化した下層民の経済要求とが重なりあって、深刻な階級対立が生み出されていた。

このような時代に活躍した賢人達は、何よりもまず国内の政治的対立を調停し、条約の実施に手腕を発揮したという点で注目された人々であった。つまり彼等は世襲的な政治権力によらずに、個人の才能あるいは弁説などによって、各都市国家の政治的経済的危機を乗り切ったか、あるいは少なくとも支配者に助言を与えたが故に賢人と称されるようになったのである。※

※この点に関しては、ジャン・ポール・デュモン、有田潤訳『ギリシャ哲学』所収の「まえがき」白水社に負っている。同書で有田潤は、W・シュミットの見解を引きつつ、次のように述べている。すなわち七賢人を出身地別にみると、イオニア人二人、ドリス人一人、アイオリス人一人、アテナイ人一人、リンドス人一人、コリントス人一人であり、これは古典期以前の各地の文化水準を反映していて、割当ては「公平」である。だが、七賢人伝承がデルポイの協力のもとに作り出されたのだとすると、この「公平」さの中に、デルポイ神官団の政治的配慮を読みとっていいのかも知れない。　cf. W. Schmid. Geschichte der griechischen Literatur, 1. 1. S. 371

七賢人が登場してくる歴史的・社会的な背景は、ほぼ以上のように解することが出来るわけであるが、彼等は一体どのような点で賢明だったのであろうか。賢人伝説に見い出される知恵は、危機対策を旨とするものであったと言えるのであろうか。つまり、危機に対する効果的な対応、先駆的な対応ということが、彼等の知恵の中身だと解してよいのであろうか。

賢人達の知恵は、確かに政治的・経済的危機への対応において発揮されたものではあるが、その対応の仕方は今日我々が考えるような性格のものではなかった。古代ギリシャ人は――おそらく他の古代人達も例外ではないのだが――神秘的・宗教的な観念ときわめて親しい間柄であった。彼等にとって、あらゆる現象は、何等かの形で神秘的・宗教的意味を帯びていた。[2] 自然現象と宗教（神々）とはきわめて密接な関係にあったし、国政上の重要問題の決定には神託をうかがうことが常識とされていた。国の盛衰はもとより、社会生活上の様々な問題、人生の運・不運、病気と医療等々のあらゆる問題が神秘的・宗教的意味をもつものとして了解されており、それ故に、この意味に相応した対応がなされたのである。七世紀末に始まり、六世紀にかけて高まった政治的・経済的危機に関しても、対応の仕方は同様であった。

この点に関して、J・P・ヴェルナンは次のように述べている。

> われわれはこの騒擾と内紛の時期の経済的条件の一部を認知することができる。宗教的・道徳的分野においてはギリシャ人は、この危機を、彼等の既存の価値体系すべてを動揺させ、世界秩序そのものを攪乱する、

罪と汚れの状態として感得したのである。

この危機の帰結は、法と社会生活の領域において、エピメニデスのごとき汚れを浄める予言者、ソロンのごとき立法者、ピッタコスのごときアイシュムネテス、ペリアンドロスのごとき僭主等さまざまの人物を含むいわゆる賢人たちの業績とされる放革であり、また知的領域においては新しいギリシャ倫理の結構を描き、その基礎概念を練り上げるための努力である。(3)

賢人達は、ヴェルナンが指摘しているように、七世紀末に始まったこの危機を「罪と汚れの状態」として感得した上で、それ相応の対応をしようとしたのである。※

※その典典的な例がエピメニデスであろう。ソロンの招きによって前五九六年にアテナイに来たエピメニデスは、前六三〇年頃に起きたキュロンの殺害によって市が蒙った汚れを浄め、疫病を終熄させたと伝えられている。

政情不安・社会不安が「罪と汚れの状態」と解され、それが更に「流血」という事態に結びつけられるのは、しごく一般的であった。例えば、ソポクレス『オイディプス王』においても、テバイをおそった災厄は「ひとつの汚れ」によるものと解され、それがライオス王の殺害に結びつけられている。

勿論このような対応が、現実の危機に対して常に有効であったとは限らない。例えば、ソロンは優れた才能を買われてアテナイのために法を制定したけれども、彼の法律は、結果的には貴族と平民のいずれも満足させることが出来なかった。僭主として活躍した賢人も、没落貴族の不満をしずめることは出来なかった。超人的な能力を駆使

することの出来た賢人も大同小異であったに違いないのである。にもかかわらず、このような対応をしたことで彼等は賢人と称されるようになった。当時の状況の中で、人々が彼等をそう評価したのである。つまり、彼等の知恵の卓越性を判定してこれを後世に伝えたのは世間の人々なのである。

このように見てくると、伝説に示された賢人達の知恵とは一体何であったのかという疑問が出てくる。賢人に固有のある特殊な知恵が明らかになるというよりも、むしろ彼等の知恵と人々の評価とが重なりあっているということが、次第に明らかになってくるからである。

七賢人は、この半世紀後に再び大きくクローズ・アップされた。彼等の名声が不動のものとなったのは彼等の存命時よりもむしろこの時代においてであったと言ってよい。七賢人の時代はもとより、それ以後もギリシャ各地の政治情勢は概して不安定であった。貴族政治に代わるべき都市国家体制はまだ生まれず、政争・党争がくり返されていたが、これに加えてイオニア地方では前五四〇年頃から東方の大帝国ペルシャの圧力が本格化してくることで、政治情勢はますます流動的なものになっていた。七賢人がクローズ・アップされたのは、まさにこのような時代においてであった。このような時代情況の中で、人口に膾炙した賢人達の逸話、箴言、金句、その他雑多なものに創作的な要素が加わって、今日に伝えられているような賢人伝説が出来上ったと考えてよいであろう。当時の人々は、自らの知恵によってこの時代の危機を乗り切っていくような人物の出現を希求していたのである。

ここまで来ると、賢人達の知恵に関する伝説は、当時の人々の知恵に対するあこがれを投影したものであることが明らかとなる。つまり、この伝説に示されている賢人達の知恵とは、ギリシャ人が理想とする知恵の姿を伝える

ものに他ならないのである。そして、賢人達の知恵に関してこれ以上のことを知る資料を我々は持っていないのである。

Ⅱ　知恵の表現

賢人達の知恵とは、ギリシャ人が理想としてあこがれる知恵に他ならなかったわけであるが、その実体とは一体どのようなものだったのであろうか。ギリシャ人は、賢人達のどのような行為に、どのような言葉に、どのような態度に知恵の輝きを感じたのであろうか。

この問題を考える際に、一つの方向を示唆してくれるのは『プロタゴラス』に登場するソクラテスの言葉であろう。ソクラテスはここでスパルタ人達の場合を例として取り上げ、スパルタ人達は戦闘や勇気という点においてのみギリシャ人達にまさっていると一般に思われているが、彼等が知恵の愛好と言論に関して最高の教育を受けていることは次のような事実から明らかだと指摘するのである。

「すなわち、諸君の誰でも、スパルタ人のなかで最も取るにたらぬ人物を選んで、その人とつき合おうとしてごらんなさい。ひとはその人物が、はじめは一般に、言論において、ある凡庸な資質しか示さないのを見出すでしょう。しかしやがて、論議のすすむうちに機会がくると、彼はあたかも投槍の達人のように、突如はっとするような、短く圧縮された言葉も投ずるのでありまして、ために対話の相手がたは、童児と何ら異

なるところのないような観を呈するにいたるのであります[4]」

これに続けてソクラテスは、「まさにこのことに気づいてスパルタ主義とは本来、体育の愛好よりは、むしろはるかに知恵の愛好にあるのだという事実を看破した人々」としてタレス以下七賢人の名前をあげ、彼等はいずれもそろってスパルタ人の教養の崇拝者であり、熱愛者であり、かつその弟子であったが故に「ひとは彼ら（七賢人）の知恵というのがほかならぬ上述のごとき性格のもの、つまり、それぞれによって語られた短い、肝に銘じるような寸言であることを、よく知ることができるでしょう」と主張するのである。

この主張によると、賢人達の知恵は「肝に銘じるような寸言」として発せられた――人々はこの寸言に知恵の輝きを感じた――ということになる。その寸言の例として、ソクラテスは「汝みずからを知れ」「分を超えるなかれ」の二例をあげているだけであるが、ストバイオスの詞華集には七賢人の寸法（箴言）が数多く収録されている。その中で、常に七賢人に数えられるソロン、タレス、ピッタコス、ビアスのものをあげるならば次の通りである。

アテナイ人ソロンは言った。1、極端端を慎め。……3、苦痛を生む快楽をさけよ。……9、友人を急いで作るな。しかし誰かを友人にしたら、急いで退けるな。……10、支配されることを学ぶことによって、支配することを知るだろう。……12、市民たちには最も快いことではなくて、最も善いことを忠告せよ。……20、眼に見えぬものを、眼に見えるものによって推量せよ。

ミレトスの人タレスは言った。1、保証、それと一緒に身の破滅。……4、いやしい仕方で金持になってはならぬ。……8、君が親たちに致すような孝養を、君自身が年寄りになった時に、子供たちから期待せよ。……11、無為は苦しみ。……12、放埒は有害なもの。……13、無教養は重荷。……17、憐れむよりも、むしろ羨め。……18、節度を保て。

レスボスの人ピッタコスは言った。1、好機を知れ。……2、汝がなそうとしていることを語るな、失敗すれば、笑われようから。……12、汝のものを獲得せよ。

プリエネの人ビアスは言った。1、大多数の人間は悪い。……14、無理強いしてではなく、承知させた上で取れ。……15、何でも君が善いことをしたら、それは神のせいにして、自分のせいにするな。(5)

さて、これらの寸言(箴言)を見渡してみると、これらは時と場合によっては確かに有意義な格言であり、処世訓であると言えるかも知れないが、これらにさほど深い知恵が秘められているとは思えない。これらの寸言(箴言)から、当時の人々は一体何を感じ取っていたのであろうか。

この点に関して示唆深いのは、プルタークがスパルタ人達の言葉使いの実例について伝えている部分であろう。プルタークは、スパルタでは子供の頃から「甘美をまじえた辛辣なところと短い言葉から汲まれる深い観察を持つ言葉」を使うように教えられるので「私も、スパルタ人の言葉は短いように見えても立派に事柄の要点を突き、聞くものの心に触れるのだと考える」と述べた後で次のような具体例をあげているからである。

デーマラトスは、時期を失した質問で自分を悩ます厭な奴が度々あの『誰がスパルタで一番偉いか。』という質問をした時に『お前に一番似ていない人だ。』と云った。或る人がエーリスの人々はオリンピアの競技を立派に正しく行なったと云って褒めた時、アーギスは『エーリスの人がが五年に一日正義を行なったところで何の偉いことがあろう。』と云った。……パウサニアースの息子プレイストーナクスはアテーナイの或る弁護論家がスパルタ人を無学だと云った時に『あなたの云う通りだ。ギリシャ人の中であなた方の処から悪いことを数わらなかったのは我々だけだ。』と云った。……ナイチンゲールの鳴声を真似る人がいるから聴きに来ないかと誘われた人が『本物を聴いたことがある。』と云った。……或る若物は厠で腰を掛けている人々を見て『老人が来ても立って席を譲れないようなところには坐りたくないものだ。』と云った。(6)

「短く圧縮された言葉」とは、具体的には、以上のような脈絡の中で発せられているのである。これらの言葉を投げ返された人は、あたかも発言を封じられたかのような状態に陥ってしまう。これらの言葉は、相手方の虚をついているからである。それ故、人々がこれらの言葉に知恵の輝きを感じたとしても何等不思議はないと言えよう。※

※これらの言葉全体をプルタークは、(1)冗長な言葉を非難する格言　(2)辛辣にして甘美な言葉　(3)何等かの形で省察に値するような意味をもつ言葉　に分類しているが、このような分類に則して言えば、最も深い意味を感じさせるのは第三のものである。ただ残念ながらプルタークは、辛辣ではあるが気のきいた面白い例ばかりを紹介してくれているので、それらから十分に深い意味を感じ取ることは出来ない。

だが、他のものと比較した場合、この第三のものは、七賢人の箴言――例えば、「汝みずからを知れ」「分を超えるなかれ」――に対して最も近い距離に在り、『プロタゴラス』に登場するソクラテスの見方に従うならば、この第三のものが洗練されていって七賢人の箴言なるものが定着し、これが後世に伝えられたのだと考えてよいであろう。もっともB・スネルはこれを哲学の発端と見なすことには反対している。

だが、これらの言葉は、ただ相手方の虚をつくだけのものだったのではない。これらの言葉が箴言という形をとって定着したとき、それは人々の心の奥にまでくいこんでくるような深い意味を帯びていた。そしてこれらの言葉に接した人々は、これらの言葉の背後に、ある種の知恵が存在しているに違いないと感じたのである。

一見すると平凡きわまりないこれらの言葉が、一体なぜそのような深い意味を帯びることが可能だったのであろうか。人々はこれらの言葉にどんな意味を感じ取ったのであろうか。この問題にアプローチするためには、賢人達の言葉（箴言）を当時の文化的脈絡の中に置き直してみる必要がある。次にソロンという具体的人物に則して、この問題を考えていくことにしよう。

Ⅲ　ソロンの知恵

ヘロドトスはアテナイの賢人ソロンに関して次のようなエピレードを伝えている。

多くの民族を征服して自らの支配下に置き、比類なき富と権勢を得、我こそはこの世で最も幸福な人間であると自負しているリュデアの王クロイソスのところへ、ある日ソロンがやってくる。クロイソスは彼にむかって、「そ

なたは誰かこの世界で一番仕合せな人間に遭われたかどうじゃ」と問いかける。先ず第一番目に自分の名があげられるに違いないと心待ちしているクロイソスに、ソロンは順次別人の名をあげていくのである。王位にあるこの自分を、仕合せな人間と思ってはくれないのかといぶかるクロイソスに、ソロンは次のように説くのである。

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということついてお訊ねでございますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。

あなたが莫大な富をお持ちになり、多数の民を統べる王であらせられることは、私にもよく判っております。しかしながら、今お訊ねのことについては、あなたが結構な御生涯を終えられたことを承知いたすまでは、私としましてはまだ何も申し上げられません。

人間死ぬまでは、幸運な人とは呼んでも幸福な人と申すのは差控えねばなりません。

人間の身としてすべてを具足することはできぬことでございます。……できるだけ事欠くものが少なくて過すことができ、その上結構な死に方のできた人、王よ、さような人こそ幸福の名をもって呼ばれて然るべき人間と私は考えるのでございます。(7)」

クロイソスはソロンの言葉が気にいらず、一顧も与えずに彼を立ち去らせた。その後クロイソスは、かつて命を助けてやったことのある男に息子の一人を殺されるという悲運にみまわれる。更にその数年後、クロイソスは神託

の解釈を誤ってペルシャと戦い、リュディアを滅亡へと導いてしまう。ペルシャ軍に捉えられ、火刑に処せられるべく薪の上に立たされた時、クロイソスは「人間は生きている限り、なにびとも幸福であるとはいえない」というソロンの言葉が如何に霊感に満ちた言葉であるかに思い至り、深い溜め息をもらし、悲しみの声をあげて三度までソロンの名を呼んだとヘロドトスは伝えている。

さて、このエピソードを通してヘロドトスは、賢人ソロンの知恵を象徴する言葉と、その言葉が深い意味を帯びる脈絡とを語っているわけである。ここに登場するソロンは、「人間は生きている限り、なにびとも幸福であるとは言えない」とクロイソスに説いているのであるが、このことは結局、人間万事塞翁が馬という観念を表明したものと見てよい。このような観念は、他との関連の一切を無視して考えるならば、比較的平凡な格言にすぎないと言うべきであろう。だがここにヘロドトスはソロンの知恵の発露を見ているのである。ヘロドトスは一体どのような脈絡の中で、どのようにソロンの知恵を把握しているのであろうか。

この問題を解く鍵になるのは、ヘロドトスの史観（更に広く言えばギリシャ人の歴史観・人生観）である。彼は神託実現史観とも呼べるような立場に立って、このエピソードを語っている。つまりこうである。――クロイソスは確かに神を敬い、様々の品をデルポイに奉納した。また彼は、デルポイの神託の正しさを実際に確かめ、戦争の成り行きについての神託を求め、これに従ってペルシャと戦った。だがクロイソスがリュディア帝国を滅亡させてしまったのは、神託解釈の失敗もさることながら、究極的には祖先の犯した罪を、彼が償ったということにすぎない。クロイソスの五代前の祖先であるギュゲスが、彼の当時の主君カンダウレスを暗殺して王位に就いた時、デル

ポイのピュティアはギュゲスの罪が五代後の人によって償われるべきことを予言したが「リュディアの国民もその歴代の王も、この託宣が実現するまではそれを気にもとめなかった」――ヘロドトスはほぼこのように述べて、クロイソスの失敗の究極的原因を必然の運命に求めようとしている。この必然の運命こそが、個人を、家を、ポリスを、そして民族を目に見えぬ力によって支配しており、これらが将来どうなっていくかは、神託を通してしばしば表明されているにもかかわらず、ほとんどの人間はこの点に関して無知なのである。

このような神託実現史観の脈絡の中で、ソロンはまず第一に人間の運命が神々の気まぐれによって流転するものであるということ十分に承知している人間として措定されている。端的に言えば、ソロンの知恵とは、神々が人間に定め与えた運命をそのまま受け入れて動じない諦観なのである。

さて、人間の運命は日々流転して止まず、それは人間にとってはすべてこれ偶然の産物であると映る。だがこの運命と人間の行ないとの間に、法則のようなものが全く存在しないわけではない。

ヘロドトスは、火刑に臨んだクロイソスが訊ねられるままに「自分の身の上はまったくソロンのいったとおりになったこと、ソロンは自分のことを言ったというより、むしろ人間一般のことを言ったので、ことに自分で勝手に幸福であると考えている人間について言ったのであると思うこと」などを話したと記しているが、この一節からは「自分で勝手に幸福であると考えている人間」は近い将来に必ず不運に見舞われるという観念を読み取ることが出来るからである。

またソロンは、特に罪人に対して次のような予言を残している。

ゼウスはかく報復す。死すべき輩とは異なり、
何事につけ直ちに怒りを燃やすにはあらず。
罪深き心持つ者ゼウスを逃れることなく、
遂にはその罪白日の下にさらさる。
今償う者もあり、後に償う者もあり。
神の怒りを避ける者もやがて復讐さるるは必定。
無実なる後継ぎ罰せらる。子供らと孫らを問わず。(8)

ここに示されているのは、悪行に対する神のさばきは、もしもその本人に対して下されない場合は彼の子孫に対して下されるという観念である。

更に一般的な次元で言うならば、当時のギリシャ人は、思いあがり、調子にのりすぎて神々のわきまえを奪うような振舞いに出る人間、あるいは幸運に恵まれ成功しすぎて申し分のないような境遇にある人間は、神々の怒りやねたみを招かざるを得ず、神々が悪しき運命を投げかけてくるのを自分の方から誘っているようなものだという観念を共有していたことがわかる。

ソロンの言葉（箴言）は、このような諸観念を表明したものと解することが出来る。これらの諸観念を貫いているもの、それは――自分勝手な不正なる行ないは、神々の気まぐれというズレをある程度伴ないはするが、最後に

は必ず悪しき運命を招くことになる――という法則である。以上のことからすると、ヘロドトスは第二に、このような運命流転の脈絡の中で、その流転の法則を感知し、世俗的な生き方を超越するような知恵をもった賢者としてソロンを措定していると言ってよいであろう。この点からすればソロンの知恵の中身は運命流転の法則に関する知識であったということになる。

ところで人間は一生のうちに様々な問題に直面する。その時人間は、実に様々な事情を考慮した上で最善の方途を選択しようとする。彼は独断的な自分勝手な行ないが神々の分け前を奪い神々の怒りやねたみを招くであろうということを十分に承知しているからである。だが彼の選択は、如何にそれが最善であるかのように見えても、必ずしも予期した通りの結果をもたらすとは限らない。予想通りの結果に満足している彼を、思いもかけぬ落し穴が待ちうける。また、目先の成功が、やがてやって来る大きな破滅の序曲であったり、度重なる失敗が時としては成功の入口であったりする。いずれにせよ彼は、自分の運命の全体像を見通すことは出来ない。その意味でほとんどの人間は現に自分の行なっている行為が神々の分け前を奪い、神々のねたみを買っているということに気づいていないのである。

このような状況に置かれている人間が自らの判断の不確かさに気づくとともに、最善の行ないは結局何であったのかと自問する時、ソロンの発した言葉（箴言）は、はじめて言い知れぬ深みを帯びて人々の心に反響する。というのもソロンは、最善の行ないとは結局正しい行ないに他ならないという立場に立ちつつ、これらの言葉を通じて、様々な場面場面において人は一体どのようにすれば正しい行ないをしたことになるのかという問題に対する答

えを、つまり正しさの規準を提示しているからである。

従って第三にヘロドトスは、諸々の行為の正邪善悪が人々には不明確なのだという脈絡の中で、それらの行為に正しさの規準を提示する知恵を、ソロンにおいて見い出しているのである。

以上に示したように、ソロンの知恵の実体は、まず第一に必然の運命に対する諦観であり、第二に運命流転の法則に関する知識であり、第三に正しさの規準であった。ソロンの知恵に関して、ヘロドトスからは以上のような示唆を受け取ることが出来よう。

ところで、このような知恵は人間に対する神々の強制の所産として結実したものではあるが、積極的な要素が皆無だったわけでは決してない。ソロンの場合で言えば、むしろそのような神々の強制のすき間をくぐりぬけるような形で、人間が自らの進歩・発展のために築きあげた橋頭堡であるというニュアンスが認められるからである。「六世紀の、伝統的な知恵に精通していたソロンは、まったくの無知から合理的な予測へと向う一種の階段を昇っている。……実際、このような知識を持つことは、人間が神々からいかに隔っているにせよ、人間が神々に少しでも似るものとなり、自己の運命を少しでも支配できるようになるための一つの手段であった。人間は確実な知識を持てるはずはないが、人間も相当な推測を立てることはできるというのが実際的な解決であった」[9]とバウラは述べている。ソロンの知恵の、このような積極性を最も象徴的に示しているのは「尺度（メトロン）」という言葉であろう。

ソロンは述べている。

英知 γνωμοσύνη の見えない尺度 μετρον ―― これこそひとり万物のの限度を把持するもの ―― を知るは難事である。(10)

尺度（メトロン）という言葉は、ホメロスの詩においては、穀物や油や酒を測る一定の度量という意味でしか用いられていない。だがヘシオドスではこれが道徳的な概念――適度とか中庸など――を表わすためにも用いられている。ソロンにおいてはこの傾向が更に押し進められている。そしてソロンは、運命という消極的な行動原理のかわりに、尺度（メトロン）という一層積極的な行動原理を打ち出したのである。これがソロンの知恵の実体であった。ソロンの知恵とは、先の断片にも示されているように、尺度（メトロン）を知る知恵に他ならなかったのである。

まとめ

賢人達の知恵に関するエピソードは、気のきいた小話風のものから、箴言・格言の類に到るまで、実に雑多である。勿論それらには、後の時代の創作も含まれていることであろう。しかしながら、これらのエピソードを当時の文化的脈絡の中において見直してみると、彼等の知恵の本領を伝えているような、深い意味を感じさせるものがある。これらを列承していったときに浮かび上ってくるので、新しい時代における人間の正しい善い生き方とは何かという主題なのである。逆に言えば、正しい善い生き方とは何かという主題が、賢人達の言動と結びつけられ、こ

れが時代の状況の中で様々に着色されつつ、雑多な箴言や格言として、今日に伝えられてきたと言ってもよいであろう。

では、この主題に対して賢人達はどのような答を出しているのであろうか。

彼等の答えは確かに雑多ではあるが、その雑多な中に、ソロンの知恵と共通する要素が含まれていることを指摘するのは比較的容易である。その要素とは、ひそかに神々の意向を伺い、人間の運命を予測し、よりよく生きるための生活指針・行動原理を提示するということに他ならない。

このような知恵は、神々の知恵の領分に一歩はいりこんではいたが——従って神々の知恵と重なる部分があったが——決して神々の領分を犯さない内容のものであり、その高度な性格ゆえに、一般の人々には手の届きかねる代物であった。それ故この知恵は、賢人達を敬愛し、彼等の言葉に熱心に耳を傾けた少数の人々に分ち与えられたにすぎなかったのである。

〔注〕

(1) Solon. Fr. 15 Loeb. C. L によ る。

(2) 一昔前は、古代ギリシャ人は合理的・理性的民族であったということが強調されたが、近年は彼等の非合理的・神秘的側面を見すえた論文の方がはるかに多い。ドッズの『ギリシャ人と非理性』の冒頭にはその事情についての言及がある。E. R. Dodds; The Greeks and she Irrational. 1951 また、バウラは、この点に関して「ギリシャ人は、神々の世界と人間の世界とは一つであると信じていたからこそ、自分たちを取りまく事物が、物質的な面と同時に神的な面をもち、

この両面は究極的には別個のものではないと信ずるのに何の困難も感じなかった」と指摘している。C. M. Bowra; The Greak Experience. 1957

(3) J・P・ヴェルナン『ギリシャ思想の起源』P70—71。吉田敦彦訳、みすず。

(4) Plato; Protagoras 342 D—E

(5) DK. 10A3 (Stob. Flor) 山本光雄『初期ギリシャ哲学者断片集』による。

(6) 『プルターク英雄伝』(一) 131—132。河野与一訳、岩波。

(7) ヘロドトス『歴史』上巻　P27—32　松平千秋訳、岩波。

(8) Solon. Fr. 2

(9) C. M. Bowra; ibid. ch. 9

(10) Solon. Fr. 16

（本学助教授）